

# 亡き娘といのちのちの授業

自分なんていなくていいと思っただけではありませんか。6歳だった長女を小児がんで亡くした愛知県豊田市のNPO代表、鈴木中人さん(61)が今春、10代向けに、いのちの大切さやがんについて学ぶ本を出版した。学校現場で広く活用してもらうため、全国の教育委員会などに2000冊を寄贈した鈴木さんは「いのちを大切にしているかと、自分に問いかけ続けてほしい」と訴える。

鈴木さんが寄贈した「子どものための『いのちの授業』」



1995年、長女・景子さんを小児がんで亡くした。3歳でがんが見つかり、3年間の闘病の末だった。一人では動けなくなった後も、また小学校に行きたいと、病室でひらがなを練習帳に書き続け、

「どんなことがあっても、お父さん、お母さんより絶対に早く死んではいけない」甲府市の駿台甲府中学校で4月26日に開いた「いのちの授業」で、鈴木さんは全校生徒約440人に熱く語りかけた。いじめや自殺などが各地で後を絶たないなか、いのちを考える心を育んでほしいとの思いを込めた。

最期まで懸命に「生き抜いた」という。



「どんな」を感じましたか。「いのちの授業」で生徒に感想を聞く鈴木さん(右) (甲府市の駿台甲府中学校で)

鈴木さんは、娘を救えなかった「罪滅ぼし」の思いから小児がんの支援活動に参加するようになった。娘から託された「いのちのバトン」をつなげたいと、2005年に大手自動車部品メーカーを退職。その後、NPO法人「いのちをバトンタッチする会」を設立し、娘の闘病や死別について語る「いのちの授業」を始めた。学校などでの講演活動は、これまでに約1500回を数えた。「娘の死を意味あるものになりたい」との一心だった。

## 小児がん闘病 父が本に

知出版社)は、この「いのちの授業」をベースに、1600冊にまとめた。「今このときを、生き抜く」「いのちのバトンを胸に生きる」など10章で構成されており、学級会などで使いやすいように1章を10分程度で読めるようにした。国は17年から、学校でのがん教育を推進しているが、「『大人の話』になってしまわないよう、小児がんについても知ってほしい」という。学校現場で「いのちの授業」を実践してもらおうと、今月26日から8月上旬にかけて、学校関係者向けに愛知、東京、京都でセミナーも開く。

鈴木さんは「子どもたちには『生』だけでなく『死』を見つめることで、本当に大切なことに気づいてもらいたい」と話す。

西ル寺音 た。16年から5年をかけて 寺座主の鷲尾遍隆・西国三 情緒に触れる絞りの産地・藍染 様々な記念行事が催されて 十三所札所会長は「令和元 (あいぞめ) が風にゆれる町

情報商材 投資やギャンブル取材を申し込んだが、回答していたが、会員からの全額